

橋弁慶

笛の巻

笛の巻（前）

シテ 常磐御前

子方 牛若丸

ワキ 羽田秋長

橋弁慶（後）

シテ 武藏坊弁慶

トモ 徒者

子方 源牛若

九月

「斯様に候者は。義朝の御内に在し羽田の十郎秋長にて候。扱も義朝の御子常磐の御腹には三男。牛若殿と申て御座候を。学問の為に鞍馬の寺へ御登せ御座候処に。学問をばし給はで。夜なく五条の橋に出で。数多の人を御斬り候。上下の煩ひかたゞく以て然る可らず候程に。常磐の御方に参り。此事を御教訓させ申さばやと存候。いかに申し候。秋長が参りて候。

シテ母
「何秋長と申すか此方へ來り候へ。扱唯今は何の為に來りたるぞ。

ワキ
「唯今参る事余の義に非ず。鞍馬の寺に御座候牛若殿。夜なく五条の橋に御出であつて。数多の人を御斬り候。上下の煩ひかたゞく以て然る可らず候へば。此方へ御申あつて。御教訓あれかしと存候。

シテ
「扱牛若殿はいづくに渡候ぞ。

ワキ 「あれに御座候。

シテ 「此方へと申候へ。

ワキ 「畏て候。此方へ御参候へ。

シテ 「いかに牛若殿。此程は寺にあるかとこそ思しに。何とて此方へは下りたるぞ。

牛若 「さん候久しく母上を見参らせず候程に参りて候。

シテ 「いや／＼お事の心を見るに。思ふといふも虚言よ。

今程平家の公達の肩を並べしを争ひ。同じ寺中に

あるとも。学問にだに勝れなば。他山の聞え寺家の覚え。かたゞ母も嬉しう思ふべきに。学問をこそせざらぬ。夜なく五条の橋に出で。人を失ふ由を聞くぞとよ。まこと左様にあるならば。母と思ふな子とも亦。

同 「思ふまじげによしなやな。か程に母は思へ共。其かひ更になき上は。しかりてもよしそなきうたての者の心や。

「よしやよし親子をも。く。思ひ思はぬ中ならば。

中々に安からぬ。御身の為は然るべし。いかなれば畜類。又は空飛び翔る鳥も。其ことわりを知ればこそ。鳩に三枝の礼をなし。鳥きうくの。孝行なるはいかばかり。などや御身は不孝なると。しかれば牛若も。手を合せ立寄りて許し給へと泣き居たり。

クセ「おことまたいとけなかりし時よりも。父に離れて

むざんやな。敵の手にも渡りなば。いかなる淵川の。瀬にも沈みもやせましと。心にかけて思ひ寝の。夢の一時。花の夕べの山風。声高く泣く時は。六波羅の人やもし。聞くらんものを悲しやと。忍びて落ちしも今思ひでの涙かな。

「母の仰の重ければ。明けなば寺へ登るべし。去乍ら此笛に。えたる便のあるぞとは。いかなる謂候ぞ。

母 「げに理の不審かな。是は弘法大師とて。貴き人の御笛を。伝へたる故なれば。斯様に我もいふぞとよ。

牛若 「抑や大師の御事は。久しき事と聞ものを。伝へ給ふはいかならん。

母 「是はもと入唐の。商人もてる笛なるに其虫喰のあるぞとよ。

牛若 「扱はしるしの何ぞとも。現はし給ふ文字やらん。

委しく語りおはしませ。

母 「是御覽ぜよ今迄は。人にも隠し御身にも。

牛若 「見せさせ給ふ事もなきに。

同 「今こそ委しくは。見も明石潟島隠れ。並ぶや蟬のもとに。巻き隠したる錦を。解きて能く見れば。

不思議やな虫喰の。一万五千。三百余歳経て。弘法大師の。御手に渡り其後に。義朝の末の子牛若が手に渡るべしと。確かなる虫喰。かたじけなや

と戴き。明けなば寺に登るべし。かまえておこと
偽はるな。又よと母はいひすて、常のすみかに入
りにけり常のすみかに入りにけり。

牛若詞
「いかに羽田。母の仰の重ければ。明けなば寺へ登
るべし。今宵ばかりの名残なれば。五条の橋に出
で。たち待ちに月を眺めうずるにてあるぞ。

ワキ 「畏つて候。(是より外の巻橋弁慶の牛若一声「扱も牛若は母の仰の重ければへ続くと
なり)

橋弁慶
牛若一声
「扱も牛若は。母の仰せの重ければ。明けなば寺へ
登るべし。今宵ばかりの名残なれば。五条の橋に
立出て。川波そへて立ち待ちに。月の光を待つべ
しと。

一声 「夕波の。氣色はそれか夜嵐の。夕ベ程なき。秋の
風。

上歌同 「面白の氣色やな。く。そぞろうきたつ我心。波

も玉散る白露の。夕顔の花の色。五条の橋の橋板を。とゞろくとふみならし。音も静かに更くる夜に。通る人をぞ待ち居たるく。

シテ詞一聲

「既に此夜も明け方の。三塔の鐘もすぎまの雲の。

光りかゝやく月の夜に。着たる鎧は黒革の。おどしに纏せる大鎧。草摺長に着なしつゝ。もとより好む大長刀。真中取て打ちかつぎ。ゆらりくといでたる有様。いかなる天魔鬼神なり共。一面を向手にたつ敵の。恋しさよ。

牛若

べきやうあらじと。我身ながらも物頼もしうて。手にたつ敵の。恋しさよ。

「川風もはや更過ぐる橋の面に。通る人もなきぞとて。心すごげに休らへば。

シテ

「弁慶かくとも白波の。立より渡る橋板を。さも荒らかに踏み鳴らせば。

牛若

「牛若彼を見るよりも。すはやうれしや人来るぞと。薄衣猶もひきかづき。傍によりそひ佇めば。

シテ

「弁慶彼を見つけつゝ。詞をかけんと思へ共。見れば女の姿なり。私は出家の事なれば。思ひ煩ひ過てゆく。

牛若彼をなぶつて見んと。行き違ひさまで長刀の柄元をはつしと蹴上ぐれば。

シテ
「すはしれ者よ物見せんと。

同 「長刀やがてとり直し。く。いで物見せん。手なみの程と。斬つてかゝれば牛若は。少しも騒がず

つゝ立ち直つて。薄衣ひきのけつゝ。しづくと太刀ぬき放つてつゝ支へたる長刀の。きつさきに太刀打合せ。つめつ開いつ戦ひしが。何とかしたりけん。手許に牛若よるとぞ見えしがたゝみ重ねて打つ太刀に。さしもの弁慶合せかねて。橋桁を二三間。しさつて。肝をぞ消したりける。あら物々しあれほどの。く。小性一人を斬ればとて。手なみにいかで洩らすべきと。長刀柄長くおつ取りの

べて。走りかゝつてちやうと切れば。そむけて右に。とびちがふ取直して裾を。なぎ払へば。踊り上つて足もためず。宙を払へば頭を地につけ。千々に戦ふ大長刀。うち落されて力なく。組まんとよれば。切り払ふすがらんとするも便なし。せん方なくて弁慶は。稀代なる少人かなとて。あきれ果てゝぞ立つたりける。

ロンギ同
「ふしぎや御身誰なれば。まだいとけなき姿にて。

かほどけなげにましますぞ。委しく名のりおはしませ。

牛若
「今は何をか包むべき。我は源牛若。

地
「義朝の御子か。

牛若
「さて汝は。

地
「西塔の武蔵。弁慶なり。互に名のり合ひ。く。

降参申さん御免あれ少人の御事。我は出家。位も氏もけなげさも。よき主なれば頼むなり。卒忽に

や思しめすらんさりながら。これ又三世の機縁の
始め。今より後は主従ぞと。契約堅く申しつゝ。
薄衣かづかせ奉り弁慶も長刀打ちかついで。九条
の御所へぞ参りける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション
『観世流謡曲錦囊 卷之三（橋弁慶）・卷之四（笛の巻）』観世流謡曲同志研究会 編